

境に果たす役割 (酒井:13), 8. エル・ニーニョと赤道波 (和方:9), 9. 湖から学ぶ自然循環系 (田中:10), 10. 植物が影響を及ぼす河川環境 (池田:12), 11. 温暖化が変える海岸環境 (磯部:12), 12. ヒートアイランドとクールアイランド (日野:29), 13. 植生による気候緩和効果と都市環境への応用 (日野・神田:15), 14. 地球規模の温暖化と植物 (内嶋:12) で, 各章に文献が紹介されており, 巻末には索引もある。

さて, 検索を終了する前に (1) の CD-ROM を開いたところ 2 件が収録されていた。その内のひとつは国

際自然保護協会による「地球環境の危機」(1981)だが, 他のひとつは故宇田道隆先生著の「海を守る」(1974)で, この書物が国会図書館収録和図書(1969以後)のなかで, キーワード「地球環境」をもつ最も古い物である事に少し感慨を覚えた。当時の海洋学会大会のナイトセッションで海洋環境問題が盛んに議論され, 現在第一線で活躍中の先生方が当時まだ学生として活発に討論されていたことがつい最近の出来事のように思ひ出された。

(理化学研究所 長島秀樹)



## 第 4 回大気科学とその大気質への応用

### (ASAAQ) 国際会議の御案内

#### 論文募集

Atmospheric Sciences and Application to Air Quality の第 4 回国際会議をウラジオストークで開催予定の所, ロシア国内の事情のため中止になりました。関係者には深くお詫び致します。従って第 4 回会議を次の要領で行なうことになりました。

日時: 1994年5月30日～6月2日

場所: ソウル (韓国)

公用語: 英語

主要議題: 大気質に関する気象学, 海岸域などでの大気汚染物の拡散を支配する気象過程, 局地・地域大気汚染モデル, 大気汚染低減のための計算技法, 局地・地域・地球規模の大気汚染観測, 事故を含む大気汚染の予測, 大気汚染物の物理・化学的変

換, 酸性雨を含めた汚染物の乾性・湿性沈着, CO<sub>2</sub> を含んだ大気中の現象,

トピックス: 地球規模の大気質

連絡先: Prof. Y. S. Chung, Environmental Science Institute, Korea National University of Education, Chongwon, Chongbook 363-791 Korea (Fax ; 82-431-275-1100)

論文提出の手続き

会議に参加し, 論文を発表しようとする人は, その研究の範囲, 結論を英語で200～400字にまとめて, 1994年2月1日迄に Prof. Chung にお送り下さい。なお提出論文はレフェリーを通し, Atmospheric Environment の特別号に掲載予定です。

いものである。

#### 参 考 文 献

- Batchelor, G. K. and A. A. Townsend, 1949: The nature of turbulent motion at large wave-numbers, Proc. Roy. Soc., A199, 238-255.  
 Gleick, J., 1988: Chaos, Penguin Books.  
 木田重雄, 1988: 乱流の不思議なふるまい, 丸善.  
 Monin, A. S. and A. M. Yaglom, 1973: Statistical Fluid Mechanics, vol. 1, J. L. Lumley Ed., The MIT

Press.

- 村上至孝, 1973: イギリス新古典主義の詩—ドライデンからクーパーへ, 研究社.  
 大塚高信, 吉川美夫, 河村重治郎, 1977: カレッジクラウン英和辞典〈第二版〉, 三省堂.  
 Richardson, L. F., 1920: The supply of energy from and to atmospheric eddies, Proc. Roy. Soc., A 97, 354-373.  
 ———, 1922: Weather Prediction by Numerical Process, Cambridge Univ. Press.  
 (北海道大学工学部 石崎健二)



### 第30回自然災害総合シンポジウム

- |                                |                      |
|--------------------------------|----------------------|
| 1. 主 催: 自然災害総合研究班              | 4. 問合せ先: 服部昌太郎       |
| 2. 期 日: 1993年10月13日(水), 14日(木) | 〒112 東京都文京区春日1-13-27 |
| 3. 場 所: 中央大学駿河台記念会館            | TEL 03-3817-1804     |
|                                | FAX 03-3814-0955     |

### 第12回日本自然災害学会学術講演会

- |                                  |                      |
|----------------------------------|----------------------|
| 1. 主 催: 日本自然災害学会                 | 〒112 東京都文京区春日1-13-27 |
| 2. 期 日: 1993年10月15日(金)           | TEL 03-3817-1804     |
| 3. 場 所: 中央大学駿河台記念会館              | FAX 03-3814-0955     |
| 4. 問合せ先: 中央大学理工学部土木工学科内<br>大会事務局 |                      |

## 7. 1994年春季大会会場について

庶務担当理事から次のように説明。竹橋会館が改装工事のため「御茶の水スクエア」を会場とした。この場合、会場費が150万円程度かかる見込み

で、大会会場費を決めた現在の規定の枠をオーバー。ただし、大会経費全体では規定の予算内に納まる見込み。これを受けて討議した結果、原案通り経費支出を了承。



## 平成5年度気象研究所研究発表会の御案内

気象研究所では、研究発表会を以下のとおり開催しますので、関心をお持ちの方は、奮って御来場ください。

1. 日時：平成5年11月26日（金）9：00～17：10
2. 場所：気象研究所講堂（つくば市長峰1-1）
3. プログラム

## 《午前》

- (1) 東アジア地域における大気汚染質の長距離輸送モデル
- (2) 成層圏循環の変動の対流圏に及ぼす影響
- (3) 中国タクラマカン砂漠における大気-地表面相互作用の研究
- (4) エルニーニョにともなう海洋蓄熱量の変動

- (5) 太平洋西部赤道域におけるCO<sub>2</sub>の大気/海洋間交換について

## 《午後》

- (6) 続発性からみた地震活動の確率的予測モデルについて
- (7) 地震活動予測支援システムの開発
- (8) 高過飽和における自然氷晶核の測定
- (9) 衛星による不均質地表面計測のための可視域大気補正アルゴリズム
- (10) 対流雲群の発生・発達に及ぼす島の影響
- (11) メソスケール降水雲の統計的研究

（事務局：気象研究所企画室）

〒305 つくば市長峰1-1（TEL 0298-51-7111）



## 1993年度東大海洋研大槌シンポジウム ヤマセ研究の過去・現在・未来

平成5年11月16～17日に、東京大学海洋研究所大槌臨海研究センター（岩手県大槌町）において、表記シンポジウムを開催します。このシンポジウムは、同センターの共同利用研究会として、海洋と関連する東北地方の気象現象に関する研究のさらなる発展を目的として開かれるものです。シンポジウムは、16日午後から17日午前にかけて行われます。

本年は、前半の16日午後特別企画として、「ヤマセ研究の過去・現在・未来」と題するシンポジウムを行います。詳細は、以下をご覧ください。17日午前、ヤマセも含んだ一般研究発表を行いますので、ふるってご参加下さい。（大槌は交通の便があまりよくありませんので、16日と17日に釜石-大槌間のバスを用意する予定です）。

このシンポジウムに参加・講演を希望される方は大いに歓迎致しますので、下記までご連絡下さい。

また、同シンポジウムの後、11月18～19日には研究代表者友定彰博士による「亜寒帯循環と北太平洋中層水」シンポジウムが開催される運びになっています。

### 記

〒980 仙台市青葉区荒巻字青葉  
東北大学理学部大気海洋センター  
川村 宏  
TEL 022-222-1800 内3346  
FAX 022-268-2179

ヤマセ研究の過去・現在・未来  
(11月16日 14:30～19:30)

東北地方の代表的な気象・海象現象であるヤマセに

ついて、広い観点から論ずることを目的として、このシンポジウムを企画した。気象学、海洋学、農業気象学、海洋気象学、気候学、衛星計測学などの幅広い研究分野からの話題提供者をあつめて、シンポジウムの全体を組み上げた。過去の研究を踏まえて、現在のヤマセに関する理解を総括し、近未来の研究の方向を模索しようとするものである。

1. 和田英夫（元函館気象台長）  
「ヤマセに関する歴史的展望」
2. 卜蔵建治（弘前大学農学部）  
「ヤマセと冷害」
3. 井上君夫（東北農業試験場）  
「ヤマセの陸上における気象特性」
4. 児玉安正（弘前大学理学部）  
「ヤマセの下層雲の物理過程」
5. 加藤内蔵進（名古屋大学大気水圏科学研究所）  
「ヤマセに関連するオホーツク高気圧の総観的特徴」
6. 木村竜治（東京大学海洋研究所）  
「ヤマセの地球流体力学的側面」
7. 力石國男（弘前大学理学部）  
「ヤマセと海洋」
8. 永田 雅（気象庁数値予報課）  
「ヤマセと数値予報」
9. 川村 宏（東北大学大気海洋センター）・十文字正憲（八戸工業大学工学部）  
「ヤマセのリモートセンシング」